茨城大学教育実践研究 42(2023),131-144

中学校家庭科における自立した消費者の育成を目指したカリキュラム開発

―― 消費行動が環境や社会に与える影響を考えるパフォーマンス課題 ――

英 保 樹 那* ・大 木 郁 実* ・ 野 中 美 津 枝**

(2023 年 10 月 23 日受理)

Curriculum Development Aimed at Fostering Independent Consumers in Junior High School Home Economics : Performance Tasks to Consider Consumer Behavior Effects on Environment and Society

Juna HABO, Ikumi OHKI and Mitsue NONAKA

キーワード : 中学校家庭科，消費者教育，パフォーマンス課題，消費行動

2012 年 12 月の消費者教育推進法により、消費者教育を通して、自らの消費行動が現在および将来の社会や地球環境に与える影響を自覚し、公正かつ持続可能な社会の形成に積極的に参画する社会をつくる「消費者市民社会」の一員を育むことが求められている。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指したアクティブラーニングの視点からの授業改善が求められており、育成する資質・能力を明確化して、学習活動を工夫し、活用力に着目した実践力を育むカリキュラムが必要である。そこで、本研究では、中学校家庭科の消費生活・環境分野に環境や社会に与える影響を考えるパフォーマンス課題を取り入れ、自立した消費者の育成を目指したカリキュラムを開発・実践し、その効果を実証的に検証することを目的とした。研究方法は、授業を実践して、環境や社会にやさしい食生活や衣生活を提案するパフォーマンス課題の授業の流れに沿って生徒のワークシートの記述内容の分析を行い、さらに全授業の事前事後で「自立した消費者」に対する意識の変容と知識・技能・活用力の変化を分析した。その結果、本カリキュラムを通して、自らの消費行動が環境や社会に及ぼす影響に対する意識が高まり、「知識」「技能」「活用力」のスキルは授業前より授業後の方が有意に高かったことから、自立した消費者の育成を目指す上で一定の有効性が立証された。

Ⅰ．はじめに

消費者教育を総合的・一体的に推進することを目的として 2012 年 12 月に消費者教育推進法が施

*茨城大学大学院教育学研究科　　**茨城大学教育学部

行された。この法律によると、消費者教育とは、「消費者の自立を支援するために行われる消費生活の教育（消費者が主体的に消費者市民社会の形成に参画することの重要性について理解及び関心を深めるための教育を含む）」と定義されている。つまり、消費者教育を通して、ひとりひとりが自らの消費行動が現在および将来の社会や地球環境に与える影響を自覚し、公正かつ持続可能な社会の形成に積極的に参画する社会をつくる「消費者市民社会」の一員を育むことが求められている。

中学校学習指導要領では、中学校家庭科の目標及び内容「C 消費生活・環境」において、「身近な消費生活について自立した消費者としての責任ある消費行動を考え、工夫すること」と明記されている（文部科学省，2018）。中学校家庭科の「消費生活・環境」の内容項目を通して、公正かつ持続可能な社会の担い手となる「消費者市民」「自立した消費者」の育成を目指したカリキュラム開発が必要であるといえる。そうした生徒を育成するためには、消費生活・環境に関する基本的な知識や技能の習得に留まることなく、それらを総合的に活用し、自らの消費生活における実践力を培うことが重要である。

2016 年 12 月の中央教育審議会答申（中央教育審議会，2016）では、予測困難で変化の激しい時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力として、学んだことを人生や社会に生かそうとする活用力、問題解決能力が重視され、学びの過程の見直しによって「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指したアクティブラーニングの視点からの授業改善が求められている。このことから、育成する資質・能力を明確化して、学習活動を工夫し、活用力に着目した実践力を育むカリキュラムが必要であると考える。実生活の課題解決能力を養うためには、リアルな文脈の中で獲得した知識や技能を応用・統合して活用できる場面を設定したパフォーマンス課題が有効である（西岡，2016）。野中（2022）は、消費者教育における「計画的な金銭管理」においてパフォーマンス課題を取り入れた協調的問題解決学習が活用力を養うことを明らかにしている。また、家庭科で習得する知識・技能・活用力を指標として用いることで、授業効果を実証的に検証できることを示唆している（野中ほか，2022）。

そこで、本研究では、中学校家庭科の消費生活・環境分野の学習において、環境や社会に与える影響を考えるパフォーマンス課題を取り入れて自立した消費者の育成を目指したカリキュラムを開発し、授業実践をして、授業効果を立証することを目的とする。

Ⅱ. カリキュラム開発と目的

１．カリキュラム開発

(1) 指導計画

中学校家庭科の消費生活･環境分野の学習において、自立した消費者の育成を目指して開発したカリキュラムの指導計画と学習活動を表 1 に示す。

全 7 時間の指導計画で、1～5 時間目に学習内容に沿って様々な学習活動を導入して知識･技能の習得を目指し、6･7 時間目に実生活での活用力を育むため、実生活を想定した知識･技能を活用するパフォーマンス課題を設定した。1･2 時間目は、売買契約や購入方法、支払い方法に関するケーススタディを通して、知識の獲得及び購入場面に応じた知識の活用を目指す。さらに 3 時間目では、商品購入シミュ

表１　開発したカリキュラムの指導計画

授業時数	授業内容	学習活動
	〈事前アンケート〉 ・自立した消費者とは、どのような消費者のことか。	
1	売買契約の仕組みと未成年者の契約取り消し	・ケーススタディ
2	購入方法と支払方法の比較・検討	・ケーススタディ・商品選択シミュレーション
3	適切な商品選択・購入のための比較検討	・ダイヤモンドランキング ・商品の購入シミュレーション
4	消費者トラブルの未然防止やその適切な対応	・ソシオドラマ・中学生にとって身近な消費者トラブルに関する事例検討
5	消費者の権利と責任	・防水スプレーやチョコレートなどの事例検討
6	**環境や社会にやさしい衣生活の提案**	**衣生活パフォーマンス課題**
7	**環境や社会にやさしい食生活の提案**	**食生活パフォーマンス課題**
	〈事後アンケート〉 ・授業についての振り返り ・自立した消費者とは、どのような消費者のことか。	

レーションを行うことで、様々な観点から必要な情報を収集し、目的に応じた消費行動ができるようにする。4 時間目は、中学生に身近な消費者トラブルに関する事例検討を行うことで、場面や状況に応じた消費者トラブルの未然防止や解決の方法を具体的に考えられるようにする。5 時間目では、防水スプレーの誤使用による健康被害や安価なチョコレート製造の裏側に関する事例検討を通して、「消費者の権利と責任」を理解して、自分の消費行動によって環境や社会への影響が大きく変化することを自覚できるようにする。そして、6･7 時間目はパフォーマンス課題として、衣生活や食生活について「購入するとき」「使用するとき」「廃棄するとき」の各段階において、自分の消費行動が環境や社会に与える影響を踏まえた生活を提案する活動を通して、実生活での活用力を育むことを目指す。

(2) パフォーマンス課題

本カリキュラムの 6･7 時間目にあたるパフォーマンス課題を取り入れた授業の流れを表 2 に示す。

6 時間目では衣生活との関連を図ったパフォーマンス課題として、「環境や社会にやさしい衣生活の提案」を設定した。まず、実生活を想定して考えやすいように、「花子さんの現在の衣生活」として改善が必要な衣生活の例を示したうえで、【衣生活の資料】を提示して読み取る活動を通して、衣服の製造から廃棄までを踏まえた環境への影響を考える。そして、「環境や社会にやさしい衣生活の提案」については、グループ活動として、「購入するとき」「使用するとき」「廃棄するとき」の段階ごとに分けて提案を行う。

7 時間目では食生活との関連を図ったパフォーマンス課題として、「環境や社会にやさしい食生活の提案」を設定した。実生活を想定して考えやすいように、「太朗さんの現在の食生活」として改善が必要な食生活の例を示したうえで、問題解決には知識構成型ジグソー法を用いた。【食生活の資料】の読み取りでは、4 つのエキスパート資料「A 食材の資源」「B 食料自給率」「C 食品ロス」「D 容器包装」について、同じ資料を担当する者同士で集まって知識や情報を集めるエキスパート活動を行う。その後、元の班に戻り、ジグソー活動として、それぞれのエキスパート資料から読み取った問題点と解決方法をジグソー班で共有する。そして、「環境や社会にやさしい食生活の提案」については、「購入するとき」「使用するとき」「廃棄するとき」の段階ごとに、ジグソー班にて提案を行う。

表２　パフォーマンス課題と授業の流れ

	授業の流れ	分析
衣生活パフォーマンス課題（6時間目）	**環境や社会にやさしい衣生活の提案** 〈花子さんの現在の衣生活〉 □　安い衣服を見つけると、つい買ってしまう。□　着ていない衣服が 10 着ほどある。 □　洗濯表示を確認せずに洗濯している。　□　流行りが過ぎた衣服は廃棄している。	
	１．T シャツが 500 円という安価で売られている理由を考える。 ２．資料の読み取りを通して、衣服の製造から廃棄までを踏まえた環境への影響を考える。 【衣生活の資料】 ①　衣服の一生　１着の衣服ができるまでの流れ　②　衣服ロスの現状　③　ラナプラザ崩壊事故 ④　先進国から発展途上国に送られた古着の山 ３．花子さんへの環境や社会にやさしい衣生活を３段階に分けて具体的に提案する。 **購入するとき**｜**使用するとき**｜**廃棄するとき** ４．班ごとに考えた花子さんへの環境や社会にやさしい衣生活を発表する。 ５．振り返りを行う。	※ ※
食生活パフォーマンス課題（7時間目）	**環境や社会にやさしい食生活の提案** 〈太朗さんの現在の食生活〉 □　毎日お肉を食べている。特に牛肉が大好き。□　毎回、アメリカ産・低価格の牛肉を購入している。 □　買った食品を食べ切れずに捨ててしまうことが多い。□　買い物の際は、レジ袋を購入している。 □　頻繁にペットボトルのお茶や水を購入している。	
	１．担当の資料（A～D）のいずれかを読み、個人で Q1・Q2 を考える。 【食生活の資料】A 食料の資源　B 食料自給率　C 食品ロス　　D 容器包装 【Ｑ１】どんな問題があるか【Ｑ２】どんな解決方法があるか ２．エキスパート活動：A~D の同じ担当で集まり、資料から問題解決につながる知識や情報を得る。 ３．ジグソー活動：元の班に戻り、エキスパート活動で得た知識や情報をジグソー班で共有する。 ４．太朗さんへの環境や社会にやさしい食生活を３段階に分けて具体的に提案する。 **購入するとき**｜**調理・食事するとき**｜**廃棄するとき** ５．クロストーク：太朗さんへの環境や社会にやさしい食生活を発表する。 ６．振り返りを行う。	※ ※

（注）※はワークシートにおける記述内容（自由記述）を分析した箇所

2. 授業実践と分析方法

開発した授業は、令和４年２～３月にＩ中学校第２学年の技術・家庭の家庭分野の時間において、４クラス(N＝140)を対象に実践した。

授業分析にあたっては、開発したカリキュラムにおける消費行動が環境や社会に与える影響を考えるパフォーマンス課題の授業効果を検証するため、パフォーマンス課題として導入した６時間目「環境や社会にやさしい衣生活の提案」と７時間目「環境や社会にやさしい食生活の提案」の授業における生徒のワークシートの記述内容を分析した。授業の流れに沿って作成したワークシートの分析箇所は、表2の指導計画に示している。ワークシートの自由記述の分析に当たっては、生徒の記述内容を意味のあるまとまりで分類してカテゴリーを生成した。

さらに、開発したカリキュラムの授業効果を検証するため、全７時間の授業の前後に同じ内容のアンケートを実施した。アンケートには、「自立した消費者とは、どのような消費者のことか。」の問いと、消費生活・環境分野の学習内容に関する「知識」「技能」「活用力」について全 13 項目を設定した。事後アンケー

トのみ、授業全体の感想を自由記述で記載する欄を設けた。なお、事前事後アンケートの分析にあたっては、事前事後の両アンケートに回答した 92 名を分析対象とした。

事前事後アンケートにおける「自立した消費者とは、どのような消費者のことか。」の分析については、同じ生徒の事前事後から変容を抽出した。消費生活・環境分野の学習内容に関する「知識」「技能」「活用力」については、それぞれの質問項目について、「あてはまる」4 点、「どちらかといえばあてはまる」3 点、「どちらかといえばあてはまらない」2 点、「あてはまらない」1 点として得点化し平均点を算出して、授業の事前事後で比較した。

Ⅲ. 結果

1. 衣生活パフォーマンス課題

(1)【衣生活の資料】から考えた衣服が環境や社会に及ぼす影響

花子さんの現在の衣生活を踏まえたうえで、【衣服の資料】を読み取って衣生活が環境や社会に及ぼす影響を考える学習活動で、生徒のワークシートの記述内容を資料ごとに分析した結果を表 3 に示す。

表 3　【衣生活の資料】から読み取った生徒の記述内容

使用した資料と内容	生徒の記述内容（人数）
資料①　衣服の一生 内容 ○1 着の衣服ができるまでの流れ ○衣服の原材料調達から店頭に届くまでの環境負荷	Q.　衣服の資源が使われることによって、環境にどのような影響が生じるか ・地球温暖化の進行（64）　・水質汚染（37 人）　・土壌汚染　(22) ・石油がなくなる（16）　・二酸化炭素が排出される（10） ・資源が減る（6）　・大気汚染（4） ・森林伐採が進む（1）　・働き手の農薬被害（1）
資料②　衣服ロスの現状 内容 ○国内アパレル供給量・市場規模・衣類の購入単価の推移 ○１人あたり（年間平均）の衣服消費・利用状況	Q.　資料を読んで読み取れたことや、その問題点を整理しましょう ・衣服の大量生産・大量廃棄が拡大している。 ・衣服の１枚当たりの価格は安くなっている。 ・衣服の在庫が増え続けると、捨てられる量も増える。 ・衣服を手放す量より購入枚数が多く、１年間１回も着られていない衣服が１人当たり 25 着もある。 ・納期遅れによる注文キャンセルが生じている。
資料③　ラナプラザ崩落事故 内容 ○ラナプラザ崩落前の労働環境	Q.　どうしてラナプラザ崩落事故が起きたのか ・違法な増改築が繰り返されていたから。(61) ・労働者の安全よりも商品の生産性を優先していたから。(54) ・安価な労働力に大手企業が依存していたから。(21)
資料④　先進国から発展途上国に送られた古着の山 内容 ○発展途上国の人々が、先進国からの古着の受け取りを拒む理由	Q.　なぜ、発展途上国の人々は「先進国からの古着の受け取り」を拒んでいるのか ・火災による大量の有毒ガスが発生するから。(58) ・化学繊維が分解されずに土壌汚染につながるから。(43) ・ゴミ処理場のようになってしまうから。(39) ・買い取り手がいないと衣服の墓場になってしまうから。(26)

資料①【衣服の一生】では、衣服の原材料調達から店頭に届くまでの環境負荷を示すデータから、衣服に資源が使われることの影響として、「地球温暖化の進行」が 64 名、「水質汚染」が 37 名、「土壌汚染」が 22 名であり、衣生活と地球環境への影響を具体的に考えることができていた。資料②【衣服ロスの現状】では、国内アパレル供給量・市場規模・衣類の購入単価の推移や、1 人あたり（年間平均）の衣服消費・利用状況のデータから、衣服ロスの現状を踏まえた問題点として、「衣服の大量生産・大量廃棄が進んでいる」といった現代の被服産業の実態や、「衣服を手放す量より購入枚数が多く、1 年間 1 回も着られていな

い衣服が 1 人当たり 25 着もある」という衣服ロスの具体的な現状を読み取っていた。資料③【ラナプラザ崩落事故】では、ラナプラザ崩落前の労働環境のデータから、ラナプラザ崩落事故の原因として「違法な増改築が繰り返されていたから」61 名、「労働者の安全よりも商品の生産性を優先していたから」54 名で、安価な衣服の背景にある劣悪な労働環境や環境負荷の実態に対する理解が促されている。資料④【先進国から発展途上国に送られた古着の山】では、発展途上国の人々が、先進国からの古着の受け取りを拒む理由のデータから、「火災による大量の有毒ガスが発生するから」58 名、「買い取り手がいないと衣服の墓場になってしまうから」26 名で、衣服の大量生産・大量廃棄の先にある環境負荷や、発展途上国の社会的な負担について考えることができている。

(2) 環境や社会にやさしい衣生活の提案

「環境や社会にやさしい衣生活の提案」として、[購入するとき][使用するとき][廃棄するとき]の 3 段階について、生徒のワークシートの記述内容を分析した結果を表 4 に示す。

表 4　「環境や社会にやさしい衣生活の提案」における生徒の記述内容

	カテゴリー（延べ数）	生徒の記述内容（人数）
[購入するとき]	衣服計画の必要性 (78)	・本当に必要な服か考える（26）　・同じような服は買わない（25） ・本当に欲しい服だけ買う（17）　・必要最低限の枚数しか買わない（8） ・環境のことを考えて購入する（1）・流行りにつられない（1）
	衣服の価格 (20)	・価格につられない（10）　・高くても長く着られる服を買う（10）
	衣服の品質 (1)	・使用されている素材に気を付ける(1)
[使用するとき]	衣服の手入れ (58)	・洗濯表示を見て洗濯する（46）　・無駄に洗剤を使わない（6） ・環境にやさしい洗い方をする（6）
	衣服の着方 (19)	・着ていない服も着る（11）　・長く大事に着る（7）　・汚さない（1）
	衣服の扱い方 (3)	・適切な保管方法を確認する（1）　・ハンガーにかけるなど形をきれいに保つ（1） ・すぐ捨てようとしない（1）
[廃棄するとき]	リサイクル (27)	・リサイクルする（18）　・捨てるときは分別する（2） ・リサイクルの行き先を考えたうえでリサイクルする（7）
	リユース (27)	・知り合いにおさがりとしてあげる（14）　・着たいと思っている人に譲る（13）
	リメイク (8)	・雑巾にリメイクして使う（8）
	その他 (15)	・流行りが過ぎても捨てない（7）　・3R を心掛ける（4） ・本当に要らないか考える（3）・服を処分することで生じる環境負荷を周囲に教える（1）

まず、[購入するとき]では、【衣服計画の必要性】【衣服の価格】【衣服の品質】の 3 つのカテゴリーに分類することができた。【衣服計画の必要性】では、「本当に必要な服か考える」が 26 名で最も多く、次いで「同じような服は買わない」25 名であることから、表 3 資料①【衣服の一生】で衣服の製造から廃棄までに使われる資源、資料②【衣服ロスの現状】で衣服ロスによって生じる環境や社会への問題を考えたことで、衣服ロス削減に向けた衣服計画に対する意識が高まったと推察される。【衣服の価格】では、「価格につられない」10 名、「高くても長く着られる服を買う」10 名であり、衣服の価値を価格以外にも見出そうとしていることから、表 3 資料③【ラナプラザ崩落事故】で安い衣服の背景を考えた学びを生かしていることが推察される。

［使用するとき］では、【衣服の手入れ】【衣服の着方】【衣服の扱い方】の 3 つのカテゴリーに分類することができた。【衣服の手入れ】では、「洗濯表示を見て洗濯する」が最も多い 46 名だったことから、花子さんの現在の衣生活「洗濯表示を確認せずに洗濯している。」（表 2）を踏まえた衣服の手入れを考えたことが推察される。【衣服の着方】は、「着ていない服も着る」11 名であることから、花子さんの現在の衣生活「着ていない衣服が 10 着ほどある。」（表 2）や資料②【衣服ロスの現状】（表 3）で衣服ロスによって生じる環境や社会への問題を考えたことを踏まえて提案した工夫であることが考えられる。

［廃棄するとき］では【リサイクル】【リユース】【リメイク】【その他】の 4 つのカテゴリーに分類することができた。【リサイクル】は、「リサイクルの行き先を考えたうえでリサイクルする」が 7 名であり、表 3 資料④【先進国から発展途上国に送られた古着の山】で受け取り手に生じる問題を読み取ったことから、行き先を考える配慮へつながったと推察される。【リユース】は、「知り合いにおさがりとしてあげる」14 名、「着たいと思っている人に譲る」13 名で、自分が着られなくなった衣服であっても捨てることなく、必要としている人へ衣服を循環しようと工夫している。【リメイク】は、「雑巾にリメイクして使う」8 名で、衣服に対して他の役割を見い出し、活用しようとしている。【その他】では、「流行りが過ぎても捨てない」7 名、「本当に要らないか考える」3 名で、一度立ち止まって衣服の価値を考える対応をしていると推察される。

以上の結果から、花子さんの現在の衣生活を踏まえ、衣生活の資料から読み取った課題を活用して、実生活を想定した［購入するとき］［使用するとき］［廃棄するとき］における環境や社会にやさしい衣生活の提案として、実践することが可能な具体的な工夫を考えることができていた。

2. 食生活パフォーマンス課題

(1)【食生活の資料】で考えた食生活の問題点と解決方法

太郎さんの現在の食生活を踏まえたうえで、食生活の消費行動における問題点と解決策を考えるエキスパート活動において、エキスパート資料【A 食料の資源】【B 食料自給率】【C 食品ロス】【D 容器包装】を担当したグループごとに生徒がワークシートに記述した問題点と解決方法を表 5 に示す。

【A 食料の資源】では、世界的に肉類の消費量が増加傾向にある一方で、牛 1 頭を飼育するのに必要な水と飼料の量や、ハンバーガーに関わっている食資源のデータから、問題点として「肉の消費量が多いと、水や飼料の消費量も比例して増える」や「世界人口が増えると食料生産が追いつけず、水不足や食料不足になる可能性がある」などを挙げており、食料における資源の有限性に着目して、現代の食生活の問題点をつかめている。解決方法では、「地産地消を心掛ける」や「和食を積極的に食べる」といった食品によって必要な水や飼料が異なることを踏まえながら食の資源を大切する工夫を挙げている。

【B 食料自給率】では、日本と世界の食料自給率やフードマイレージの比較のデータから、問題点として「世界と比べて日本の食料自給率は 37%と低い」や「日本は一人当たりのフードマイレージが高いため、多くの二酸化炭素を排出している」などが挙げられており、日本の食料自給率の低さによって生じる食生活と環境との問題を関連付けて考えることができている。解決方法では、「国産のものを選んで購入する」や「米粉パンを食べる」といった記述から、日本の食料自給率の向上や、食料輸入時における環境への影響を考えることができている。

【C 食品ロス】では、日本の食品ロスの現状や、それによる二酸化炭素の排出や埋め立て処分場のひっ迫のデータから、問題点として「日本の食品ロスは世界の食品援助量を上回っている」や「廃棄した食品を燃やすことで二酸化炭素が排出されるため、地球温暖化につながる」などが挙げられており、日本が抱

表５　食生活のエキスパート資料別　問題点と解決方法の生徒の記述内容

資料	資料の内容	生徒の記述内容	
		【Q1】問題点	【Q2】解決方法
A 食材の資源	○世界の肉消費量と食品別バーチャルウォーター ○世界の食資源の現状 ○ハンバーガーに関わっている食の資源	・肉の消費量が多いと、水や飼料の消費量も比例して増える ・特に牛肉は消費する水や飼料の量が多い ・世界人口が増えると食料生産が追い付けず、水不足や食料不足につながる可能性がある	・地産地消を心掛ける ・和食を積極的に食べる ・資源を大切にする ・国産の肉を購入する
B 食料自給率	○日本と世界の食料自給率 ○和食と洋食による食料自給率の違い ○フードマイレージの世界比較 ○輸入と国産によるＣO2 排出量の違い	・世界と比べて日本の食料自給率は 37%と低い ・海外からの輸入で日本の食生活が成り立っている ・日本は人口一人当たりのフードマイレージが高いため、多くの二酸化炭素を排出している ・地球温暖化が加速する	・国産のものを選んで購入する ・米粉パンを食べる ・国内の食料自給率を上げる ・地産地消を心掛ける
C 食品ロス	○食品ロスと世界の飢餓の関係 ○日本の食品ロスの実態 ○食品ロス削減に向けて実践しやすく効果があった取り組み	・世界には飢餓に苦しむ人が多くいる ・日本の食品ロスは世界の食糧援助量を上回っている ・日本は毎日一人当たりおにぎり一個分の食品ロスがある ・廃棄した食品を燃やすことで二酸化炭素が排出されるため、地球温暖化につながる	・使い切れる分だけ購入する ・家にある食材を把握して買い物する ・食品の保存方法を見直す ・残さず食べる ・野菜の茎や皮は捨てずに使う
D 容器包装	○海洋中のプラスチック量 ○廃棄プラスチックの行方 ○缶入りクッキーや仕出し弁当に使用されている容器包装 ○ペットボトルの分別によって生まれる新しい製品	・日本はプラスチック生産量・ごみの発生量が多いため、ごみの埋め立て地がひっ迫している ・国内で年間に流通するレジ袋の枚数は推定 400 億枚 ・リサイクルできないプラスチックごみが増えて、海のごみが増えてしまう ・2050 年にはプラスチックごみが魚の量を上回る可能性がある ・過剰包装によってごみが増えている	・エコバッグを使う ・水筒を持ち歩く ・過剰包装を避ける ・ラベルレスの商品を買う ・リサイクルする ・ごみを分別する

える食品ロスの課題と環境への影響を考えることができている。解決方法では、「使い切れる分だけ購入する」「残さず食べる」「野菜の茎や皮は捨てずに使う」など、購入から調理、食事に至るまでの食品ロス削減の取り組みを考えることができており、「食品の保存方法を見直す」からは、食品を適切に扱うことで無駄にしないようにしていることがわかる。

【D 容器包装】では、海洋中のプラスチック量やリサイクルされるプラスチックごみのデータから、問題点として「日本はプラスチック生産量・ごみの発生量が多いため、ごみの埋め立て地がひっ迫している」や「過剰包装によってごみが増えている」などが挙げられており、日本のプラスチックごみの生産量の多さや、過剰包装の実態、ごみの埋め立て地のひっ迫といった環境への悪影響を考えることができている。解決方法では、「エコバッグを持ち歩く」といったごみを出さない工夫や、「過剰包装を避ける」といった自身の消費行動を見直す工夫、「ごみを分別する」といったごみの出し方の工夫がみられたことから、自分の食生活を取り巻くごみの問題と環境への影響を踏まえて、自分にできるごみを減らす工夫を考えることができている。

以上４つの資料に対する記述内容から、現代の食生活を続けていることによって食資源の不足やフードマイレージの増加、食品ロスやプラごみの増加による環境への影響といった問題点を見つけることができ、自らの食生活と環境との関連を図りながら解決方法を工夫して考えられていたことが推察される。

(2) 環境や社会にやさしい食生活の提案

ジグソー活動で元の班に戻り、エキスパート活動で得られた情報を共有したうえで、「環境や社会にやさしい食生活の提案」として、[購入するとき][調理・食事するとき][廃棄するとき]の 3 段階で生徒が考えてワークシートに記述した内容について分析した結果を表 6 に示す。

表 6　「環境や社会にやさしい食生活の提案」における生徒の記述内容

	カテゴリー（延べ数）	生徒の記述内容（人数）
[購入するとき]	地産地消 (45)	・国産の食品を購入する(33)　・地元で作られた食材を購入する（12） ・原産地を確認してから買う（3）
	食料自給率 (4)	・食料自給率が高い食品を購入する（2）・肉だけでなく、魚も購入するようにする（2）
	食品ロス (60)	・食べ切れる量だけ購入する（45）・消費期限が迫っているものから買う（8） ・家にある食材を把握して買い物する（5）・献立を考えて食材を買う（2）
	容器包装 (47)	・エコバッグを使う（30）・容器がリサイクルできるか確認する（10） ・包装が少ないものを購入する（7）
[使用するとき]	食事 (51)	・残さず食べる（43）　・好き嫌いせずに食べる（8）
	調理方法 (78)	・食べ切れる分だけ調理する（35）　・無駄なく調理する（25） ・買ったものは捨てずに使い切る（7）・消費期限や賞味期限を確認して調理する(6) ・長期保存が可能な調理方法をする（3）・節水する（2）
	地産地消 (18)	・和食をつくり、食べる（15）　・郷土料理を食べ、地産地消を心掛ける（3）
	食材の保存 (12)	・使いきれない食材は冷凍保存する（8）　・使い切れないときはおすそ分けする（3） ・腐らないように保存方法を工夫する（1）
	容器包装 (2)	・プラスチックスプーンを使わない（1）　・マイボトルを使う（1）
[廃棄するとき]	ごみの出し方 (75)	・ごみの分別をする（43）　・ポイ捨てしない（11） ・ペットボトルはふたとラベルに分けて廃棄する（7） ・容器は洗ってから廃棄する（6）・油は固めて捨てる（5） ・自治体の指示に従ってゴミ出しをする（3）
	ごみの活用 (59)	・容器包装をリサイクルする（44）　・本当に捨てる食材かよく考える（11） ・レジ袋はごみ袋として使う（4）

[購入するとき]は、【地産地消】【食料自給率】【食品ロス】【容器包装】の 4 つのカテゴリーに分類することができた。特に、【食品ロス】が 60 名と最も多く、そのうち「食べ切れる量だけ購入する」が 45 名であることから、太郎さんの現在の食生活が「買った食品を食べきれずに捨ててしまうことが多い」(表 2)ことを踏まえ、エキスパート活動で食の資源の有限性や、日本の家庭内食品ロスによって生じる環境問題を考えたことが、食料を無駄にしない購入方法の工夫へつながったと推察される。次いで、【容器包装】が 47 名と多く、エキスパート活動で容器包装と環境問題を考えたことによって、購入段階において必要以上のごみを出さない容器包装の選択に意識を向けていることが推察される。さらに、【地産地消】が 45 名で、そのうち「国産の商品を購入する」が 33 名と多いことから、エキスパート活動で日本の食料自給率が低いことや、それによって生じる環境負荷を考えたことによって、地産地消を中心とした食品の選択に対する意識が高まったことが推察される。

[使用するとき]は、【食事】【調理方法】【地産地消】【食材の保存】【容器包装】の 5 つのカテゴリーに分類することができた。特に、【調理方法】が 78 名で最も多く、そのうち「食べ切れる分だけ調理する」35 名、「無駄なく調理する」25 名であることから、エキスパート活動で調理中に生じる食品ロスの問題点を考えたことで、調理者としての視点に立って、食材を無駄にしない調理方法の工夫が挙げられたと推察される。

［廃棄するとき］は、【ごみの出し方】【ごみの活用】の 2 つのカテゴリーに分類することができた。【ごみの出し方】では「ごみの分別をする」43 名、「ペットボトルはふたとラベルに分けて廃棄する」7 名、【ごみの活用】では「容器包装をリサイクルする」が 44 名であることから、エキスパート活動で容器包装のリサイクル率の低さによって生じる環境問題を考えたことで、ごみの分別の大切さを認識している生徒が多いことが推察される。

以上の結果から、太郎さんの現在の食生活を踏まえ、エキスパート活動で食生活のエキスパート資料から考えた問題点と解決方法を活用して、実生活を想定した［購入するとき］［使用するとき］［廃棄するとき］における可能な環境や社会にやさしい食生活の提案を具体的に考えることができていた。

3. 授業実践に関する生徒の振り返りと事前事後における生徒の変容

(1) 授業後の生徒の振り返り

開発したカリキュラムの全 7 時間の授業実践後に授業の振り返りで生徒が書いた自由記述を分析した結果を表 7 に示す。

表 7　授業後の振り返りにおける生徒の記述内容

	キーワード		生徒の記述内容	人数
カリキュラムの授業内容	売買契約		・これまでは売り手と買い手の関係について深く考えたことがなかったので、授業を通して深く学んだ。	4
	購入方法・支払方法		・クレジットカード利用への不安があったが、メリットを知ることができたので、今後は場面に応じた支払方法を考えて生活していこうと思った。	5
	商品選択		・日常生活で消費者として安全性や機能性を考慮して商品を選ぶほかに、環境への配慮も大切だと思った。	3
	消費者被害		・消費者被害にあったときの対応や知識が身についた。 ・クーリングオフ制度への理解を深めたい。	11
	権利と責任		・消費者にも責任があることが分かった。 ・責任を自覚して生活できるようにしたい。	8
	環境や社会への影響	環境	・消費生活を見直して、環境に影響するか理解できた。 ・環境に気を付けることが大事なので、必要なものだけ買うようにしたい。	18
		社会（作り手）	・外国には飢餓で苦しんでいる人がいる現状を知ったので食生活を見直さなければならないと思った。 ・今まで何も考えずに安いものを買っていたけれど、なぜ安いのかなどを考えられるようになっていた。	4
		環境＋社会（作り手）を含む	・作り手側や世界にも影響が及ぶと知ったため、環境に配慮したり、生活を工夫したいと思った。 ・消費生活を送る私たちにとって、消費や購入だけでなく、その先の契約や環境、作り手のことまで考えた生活を送ることが大切だと思った。	4
消費行動	現在		・自分の行動には、あまりよくない消費生活が意外と含まれていることに気づかされ、生活のふり返りをしようと思った。	4
	今後		・今まで以上に考えて行動するようにしようと感じた。 ・ならったことをいかして生活していきたい。	8
授業感想	新しい発見		・これまであまり考えなかったことを考えるようになった。 ・知識が増えてよかった。	15
	難易度		・楽しくて面白かった。 ・むずかしかった。	9

カリキュラムの授業内容に沿って、学習内容のキーワードで分類することができた。「売買契約」「購入方法・支払方法」「消費者被害」「消費者の権利と責任」「環境や社会への影響」といった全学習内容を網羅して、知識理解や学びを実生活に生かそうとする記述がみられたことから、学習活動の工夫による効果があったと考えられる。特に「環境や社会への影響」は合わせると 26 名と多く、5 時間目の消費行動が社会や環境に与える影響から「消費者の権利と責任」を考える学習活動、6・7 時間目で実践した「環境や社会にやさしい衣生活や食生活の提案」のパフォーマンス課題が、「消費生活を送る私たちにとって、消費や購入だけでなく、その先の契約や環境、作り手のことまで考えた生活を送ることが大切だと思った」といった記述につながっていることが推察される。さらに、学びを通して、自分の現在の消費行動を反省したり今後の消費行動について言及したりしている生徒もいた。また、授業を通しての「新しい発見」が15名で、「これまであまり考えなかったことを考えるようになった」などの感想があり、本カリキュラムが生徒にとって深い学びにつながったことが推察される。

(2) 事前事後における生徒の変容

①「自立した消費者」（自由記述）の変化

授業前と授業後に行ったアンケートで、「自立した消費者とは、どのような消費者のことか。」の自由記述の変化について、生徒が書いた事前事後の記入例を表８に示す。

表８　「自立した消費者」に対する生徒の事前事後比較

生徒	授業前	授業後
A	一人で消費を完結することができる。	消費者として何をすべきか、できるかを環境・作り手・未来など様々な視点で考え、商品を購入する消費者
B	職に就いている人	消費生活が環境や社会に及ぼす影響を理解している人
C	自給自足をしている消費者	商品を買うときに環境などのことを考えられる。商品を使いきれるか考える。
D	出された食事を食べきる。	環境や社会問題、売買制度を理解してる人。物を買う人。
E	自分で生産・消費する	自分の消費行動が環境に与える影響を考えることができる人
F	社会人になった消費者	地球環境やこれからの地球の未来を考えて買うことができる人
G	自分の稼いだお金で商品を買う消費者	消費者自身に起こった問題の解決方法に関する知識や買う側、売る側の権利や義務を知っている消費者
H	分からない。	環境への影響や、できるだけ環境に良いものを選択する。商品を比較検討する。

授業前は、ほとんどの生徒が「自立した消費者」に対するイメージを一文で表しており、生徒 E「自分で生産・消費する」や生徒F「社会人になった消費者」のような記述が目立った。もしくは、生徒Hのように「分からない」と記述した生徒が 16 名いた。しかし、授業後では、「分からない」と記述した生徒はおらず、内容についても具体的な消費行動の提示や、消費行動と環境や社会との関連を挙げるなど、明確に意見が書かれていた。

たとえば、生徒 A では、事前「一人で消費を完結できる人」と記述していたが、事後では「消費者として

何をすべきか、できるかを環境・作り手・未来など様々な視点で考え、商品を購入する消費者」と具体的に記述している。カリキュラムを通して、自分の消費行動が社会や環境に与える影響を自覚し、消費者の責任を自覚できていることが推察される。

② 消費生活に関する知識・技能・活用力の変化

全授業実践の事前事後アンケートにおける消費生活に関する知識・技能・活用力を分析した結果を表9に示す。

「知識」「技能」「活用力」の全ての項目において、事前よりも事後の方が有意に高い。特に、「知識」「技能」の項目では有意差が大きく、学習内容で習得すべき知識・技能は明らかに向上しており、今回開発したカリキュラムにおける授業効果があったといえる。「活用力」では、特に「⑬商品を選ぶときは環境や作り手のことを考える。」が 2.93 から 3.48 に向上している。

今回 6, 7 時間目に導入したパフォーマンス課題は、「④消費者の権利と責任が分かる。」、「⑥自分の消費生活が環境や社会に与える影響を考えることができる。」、「⑬商品を選ぶときは環境や作り手のことを考える。」との関連が強い。いずれも著しく向上($p<0.001$)していることから、消費行動と衣生活・食生活

表9　消費生活に関する知識・技能・活用力の事前事後比較　N＝92

	項　目	事前アンケート		事後アンケート		t検定
		AV	SV	AV	SV	
知識	①売買契約の仕組みが分かる。	2.50	1.043	3.55	0.542	***
	②クレジットカードの仕組みが分かる。	2.80	0.986	3.46	0.638	***
	③消費者被害の背景とその対応について分かる。	2.24	0.942	3.53	0.583	***
	④消費者の権利と責任が分かる。※	2.58	0.952	3.51	0.564	***
技能	⑤購入方法と支払方法それぞれの特徴を考え、状況に応じて判断できる。	3.05	0.869	3.66	0.498	***
	⑥自分の消費生活が環境や社会に与える影響を考えることができる。※	2.97	0.977	3.60	0.696	***
	⑦購入場面で、様々な観点から必要な情報を収集し、目的にあった消費行動ができる。	3.08	0.905	3.60	0.612	***
	⑧状況や場面に応じて、適切な購入方法と支払方法を選ぶことができる。	3.20	0.872	3.52	0.671	***
	⑨消費者被害にあったとき、その場面や状況に応じて適切な相談機関や制度に頼ることができる。	2.41	0.963	3.47	0.654	***
活用力	⑩商品を選ぶときには、品質表示を確認する。	2.88	1.036	3.41	0.816	***
	⑪インターネットの情報が正しいかどうか確認するようにしている。	3.38	0.768	3.64	0.624	*
	⑫電気や水を使いすぎないようにしている。	3.26	0.863	3.60	0.612	**
	⑬商品を選ぶときは環境や作り手のことを考える。※	2.93	0.964	3.48	0.687	***
総合平均点		2.87	0.59	3.54	0.438	***

(注)※はパフォーマンス課題に関連する資質・能力　　*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

を関連させながら、環境や社会にやさしい衣生活・食生活の提案を行ったパフォーマンス課題は、知識・技能・活用力ともに授業効果があったと考えられる。

Ⅳ. まとめと今後の課題

本研究では、中学校家庭科の消費生活・環境分野の学習において、自立した消費者の育成を目指したカリキュラム開発を行い、その学習効果を実証的に検証した。開発したカリキュラムは全 7 時間の指導計画で、1～5 時間目に学習内容に沿って様々な学習活動を導入して知識・技能の習得を目指し、6・7 時間目に実生活での活用力を育むため、学んだ知識・技能を活用する実生活を想定したパフォーマンス課題を設定した。パフォーマンス課題では、衣生活と食生活の両方において[購入するとき][使用するとき][廃棄するとき]の 3 段階に分けて、環境や社会に及ぼす影響を考えた工夫を提案することで、衣生活や食生活に対する断片的な意識や取り組みに留まることなく、生活全体を営む「自立した消費者」としての当事者意識を育み、実生活の消費行動へ活用できるようにした。

本カリキュラムの授業を実践して、パフォーマンス課題の授業の流れに沿って生徒のワークシートの記述内容の分析を行い、さらに全授業の事前事後で「責任を自覚した自立した消費者とは、どのような消費者のことか。」に対する意識の変容と知識・技能・活用力の変化を分析した。

その結果、6・7 時間目の衣生活/食生活のパフォーマンス課題への取り組みでは、資料の読み取り活動やエキスパート活動によって、現代の衣生活や食生活の実態が環境や社会へ及ぼす問題を考えることができていた。環境や社会にやさしい衣生活/食生活の提案では、[購入するとき][使用するとき][廃棄するとき]の各段階において、問題解決に向けた多面的な視点をもって、自分の実生活とのつながりを見い出しながら環境や社会に及ぼす影響を考慮した消費行動の工夫を提案することができていた。

さらに、授業の振り返りにおける自由記述の分析では、本カリキュラムの学習内容に関する理解を示す具体的な記述がみられたが、特に「環境や社会への影響」に関する記述が多くみられたことから、自分の消費行動が環境や社会に及ぼす影響に対する意識の高まりがみられたことが推察される。事前事後における「自立した消費者」に対する意識の変容では、事前では責任ある消費者像や消費行動を具体的に記述している生徒はみられなかったものの、事後では消費行動が環境や社会に及ぼす影響について具体的に記述している生徒が多くみられた。そして、知識・技能・活用力の事前事後比較では、全ての項目において、事前よりも事後の方が有意に高かった。特に、活用力の変化として、「商品を選ぶときは環境や作り手のことを考える。」で有意に高かったことから、本カリキュラムにおけるパフォーマンス課題によって、消費行動が環境や社会に与える影響を考え、実生活での活用力向上につながったことが推察される。

以上の結果から、本カリキュラム開発によって、消費行動が環境や社会に与える影響を考え、自立した消費者の育成を目指す上で一定の効果があることが明らかになった。今後の課題は、家庭科の授業を通して、衣生活分野や食生活分野のみならず、他の分野との関連を図りながら、一人一人の子どもたちが自らを責任ある消費者と捉え、環境や社会に与える影響を考えた自立した消費者の育成を目指したカリキュラム開発をして実証研究をしていくことである。

謝辞

本授業研究に協力して下さった中学校及び生徒の皆さまに感謝いたします。なお、本研究は、JSPS 科研費(JP22K02883)の助成を受けたものである。

引用文献

文部科学省，2018,『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 技術・家庭編』(開隆堂出版).

西岡加名恵編著，2016,『資質・能力を育てるパフォーマンス評価　アクティビティをどう充実させるか』(明治図書).

野中美津枝・谷昌之・岩﨑香織・齋藤和可子・仲田郁子・三沢徳枝・吉野淳子・若月温美，2022,「高校家庭科で育てる生活リテラシーの検討-高校生の実態調査を通して-」『日本家庭科教育学会誌』64（4)，日本家庭科教育学会，256-265.

野中美津枝，2022,「消費者教育におけるパフォーマンス課題を取り入れた協調的問題解決学習の効果」『消費者教育』第 42 冊，日本消費者教育学会，79-88.

中央教育審議会，2016,『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申)』.